

すんでいき、ついには、もっとも単純な諸規定に到達してしまうであろう。そこから、こんどは、ふたたび後方への旅がはじめられるはずで、ついには私は、ふたたび人口に到達するであろう。しかしそれは、こんどは、全体の混沌とした表象としての人口ではなくて、多くの規定と関連とをもつ豊富な総体としての人口である。」

経済学なしに人口学が成り立ちうるであろうか。これが私の疑問である。

〔都留重人〕

E・H・カー

『ソヴェート・ロシア史—1国社会主義』

Edward Hallett Carr, *A History of Soviet Russia. Socialism in One Country 1924—1926*. Vol. I. London, Macmillan, 1958, x, 557 pp.

カー (Edward Hallett Carr) のこの書物は、彼が今から9年前の1950年にはじめた大きな仕事の1部分であり、継続である。その仕事の全体には『ソヴェート・ロシア史』 (*A History of Soviet Russia*) という総題がつけられている。この総題のもとにこれまでに刊行された分はつぎの4冊である。——*The Bolshevik Revolution*¹⁾ 1917—1923, Vol. I, 1950; Vol. II, 1952; Vol. III, 1953; *The Interregnum 1923—1924*, 1954. こんど出たこの書物すなわちここで書評しようとする *Socialism in One Country 1924—1926*, Vol. I, 1958. は、この『ソヴェート・ロシア史』の体系のなかの第5冊めに当り、以下続刊の予定である。

いまから9年前にこの仕事全体をはじめるとして著者は、「革命の諸事件ではなくて……革命から発生した政治的、社会的、経済的秩序の歴史を書くこと」を自分の仕事の目標としてたてた。著者が9年前にはじめたこの仕事は蜿々と今日までつづき、はじめの予定よりはるかに大きい4冊の書物を世に送り出したが、そのあとで

この巻にとりかかってみて、著者は、まさしく著者の最初の主題としてとりあげたところの問題の核心にとりついたように感じたとのべている。そのわけはこうである。「1917年の革命の結果成立した新しい秩序は、1920年代の中頃になってはじめてしっかりとした形をとりはじめた。1924年から1926年にいたる数年間は決定的な転換点 (a critical turning-point) であり、革命政権によかれあしかれその決定的な方向を与えた」。この数年間は、著者のみるところによれば、スターリンがジノヴィエフとカーメネフと共同してトロツキーを敗北せしめたあとで、この2人とも袂をわかち、順次彼等をうちたおし、党および国家の上に彼の個人的權威を現実のうちたてた時期である。この勝利は集団指導の扮装の下に、工業化と国の自給自足という名目をかりて、達成された。この名目が「1国社会主義」“Socialism in One Country” のスローガンに要約されたのである。この書物の表題である「1国社会主義」はこのような意味で用いられている。

「1国社会主義」についてのこのような考え方に賛成の人は別であるが、そうでない人であれば、こらいう考え方にもとずいてたてられた本書全体の構成が、かなり無理なものであることも容易になつてく行くと思う。事実はげしい勢で革命的事件が継起的に進行して行くので、著者がいやおうなしにその事実上の順序に従わざるをえなかった最初の巻にくらべると、あとの巻になればなるほど著者の方法論の歪みがより多く書物の構成の歪みとなって現われてくる。ここらで念のためにこの書物の構成をしめしておこう。——第1部 背景(第1章 歴史の遺産, 第2章 外貌の変化, 第3章 階級と党, 第4章 人物), 第2部 経済復興(第5章 農業, 第6章 工業, 第7章 労働, 第8章 商業および貿易, 第9章 財政・金融, 第10章 計画化), 以上に若干の附録的なものがついている。²⁾

以上のように述べてくると、評者が本書にたいしてかなり否定的な評価をくだしているようにとられるかもしれない。今までのべたことにかんする限り、事実そうである。しかし、そのような否定的な面だけを云うのであれば、評者はこの書物を書評の対象としてとりあげなかったはずである。とすれば、この書物の長所はどういう点にもとめられるのであろうか。

この書物の長所の第1点は、この書物がロシア人でな

1) こんど邦訳が出た第1巻(原田三郎・田中菊次・服部文男訳『ソヴェート革命史』みすず書房 1959年3月)は主として革命史の、第2巻はソヴェート経済ないし経済史の、第3巻はソヴェート外交ないし外交史の研究者に役立つ。なお、第1巻の翻訳は、評者のみだり、苦心の訳業で、正確である。ソ連に特有な制度やカテゴリーについても、この訳書の用語は信頼しうる。

2) この構成から容易にわかるように、また実際に読んでみてもそうであるが、本書の価値はむしろ後半にある。とくに第5章以下をそれぞれ独立のものとして読んだ方が、本書への approach としては better であろう。

い1人のイギリス人の書物であるという点である。ロシア人やアメリカ人がもちえない種類の客観性をイギリス人ならもつことができる。そういう意味で、イギリスのソヴェート研究が国際的に一種の権威をもっているように、この著者の『ソヴェート・ロシア史』全体が、多くのソヴェート史ないしソヴェート経済史のなかで、一種の reliability を保っていることは否定しがたい。実例をあげていうと、この書物の第4章で彼はこの時期の主要な「人物群像」(personalities)として、トロツキー、ジノヴィエフ、カーメネフ、ブハーリン、スターリンを、いまここにあげた順序であげて、彼らを論評しているが、それによると、スターリンをのぞく4名がこの時期に失脚せざるをえなかった個人的必然性が、かなりはっきりとわかる。アメリカ人が書けば徹頭徹尾スターリンの陰謀になってしまって、以上4名がスターリンとくらべて性格的にも否定的な面をより多くもっていた点をこの著者のようにはえぐり出さなかったであろうし、ロシア人が書けば、第1に、各個人の個人的特徴についてこれ程たちいりはしなかったであろうし、第2に、スターリンにたいして余りにも不当な寛大さをとったであろう。(これらの5人にたいして著者がどういう描写や評価を与えているかを引用によってしめしたいところであるが、それは省略しておこう)

この書物の第2の長所は、この書物が、よかれあしかれきわめてゆたかな資料的基礎の上にたっていることである。とはいっても、もちろんロシア人でない著者がロシア人以上に豊富な資料にとりまかれて仕事をしたというわけではない。現に著者は、ロシアに行ってそこで原資料を操りつつこの書物を書いたのではない。著者の序文を読むと、アメリカ国内でソヴェート関係資料を豊富にもっている諸機関の名前が羅列されている。これらの機関を著者は歴訪して、最後にイギリス国内の資料によって仕上げをしている。³⁾ 評者の推測であるが、ロシア以外の国でソヴェート史を書く著者として、アメリカとイギリスに在る資料や文献をふまえて仕事をするという

3) 1箇所だけ備忘の意味で引用しておく。——“……the Marshall Library of Economics possesses the copy presented to the late Lord Keynes in Moscow in September 1925 of the extremely rare first Control Figures of Gosplan……”ここに言及されているのはケンブリッジ大学内の「マーシャル文庫」である。

態度は、もしそれがとりうるならば、まず一番正しい態度であろう。著者はそれをとりうる立場にあった。そういう意味で、本書の資料的基礎は広大であり、それをもとにしてかかれた描写は realistic でみずみずしく、また本書の脚注は、今後同じような性質の研究を進めようとするものにとって重要な指針を提供している。

この2つの点、つまりロシア人でなくアメリカ人でもないイギリス人の保ちうる客観性と、ソ連以外の地域でえられる最大限の資料との接触という2つの長所を結びあわせてみると、そこから本書のかなりユニークな長所がでてくる。実例によってしめすと、本書の第10章の「計画化」のなかには、初期のゴスプランを研究するために、今後われわれに役だちうるような具体的な細目的な叙述がはいっている。新設のゴスプランとナルコムフィンとの対立、ナルコムフィンのゴスプランにたいする妨害というようなことが、事実この時期に存在したことは恐らく否定し難いように思われるのであるが、評者がみた限りのロシア文献にはこういう意味の指摘はない。ロシア文献では、どうしてもこれがきれいごとになって消えうせるか、正統派と階級敵との対立というぬきさしならぬ定型におしこめられてしまうか、どちらかである。この点は本書の独壇場というべきであろう。また、この時期のストゥルミリンの活動にしても、工業化と計画化とのむすびつきについても、従来のソヴェート文献にはみられない一種の生々しさが本書の叙述からは感ぜられる。正しい方法でさえあれば、自国人が自国の歴史を書くのが一番いいと思われるが、現実には必ずしもそうはいかないというのが、いってみれば同時代史のおとしあなであろうし、そのおとしあなのおかげで本書は、1920年代のソヴェート経済の研究にとって、一種独特なユニークさをもつ資料として役立つ。

そういう意味で、本書の特徴的な主張なり見解なりをここへ要約してしめすということは、この書評ではできないし、またそれをするには、このような種類の書物には必要でもない。1人でも多くのソヴェート研究者ないしソヴェート史研究者を、この、data と文献の倉庫ともいべきもの前へつれて行き、実際に自分の手でこの倉庫のなかをあたってみる気にならせえたとすれば、評者の任務が、それでおわったともいいうるのである。

〔野々村一雄〕